

2023 年度

国府台女子学院 中学部

第二回入試

国 語 (50 分)

【注 意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. **受験番号**は解答用紙の決められたところにはっきりと書いてください。
3. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
4. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、だまって手をあげ、先生にたずねてください。
5. **答えは、すべて別紙解答用紙に記入してください。**

注意Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

□ 次の各問題に答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字の読みはひらがなで答えなさい。

- ① センジンの知恵に学ぶ。
- ② 新たな試みでカツロを見い出す。
- ③ 新たな設備にトウシする。
- ④ 落語で高座にあがる。
- ⑤ 合宿所で起居を共にした仲間。

問二 次の（ ）に当てはまる最も適切な語を、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- 盆ぼんと正月いっしよが一緒いっしょにきたような（ ）だ。
- ア 騒さわがしさ イ 忙いそがしさ ウ 明あるさ エ 楽たのしさ

問三 次の文で説明された「鳥」の名前をひらがなで答えなさい。

カモ科の鳥類の一種で、マガモを家畜化したもの。日本ではあまり食用にされないが、フランスや中国では肉だけでなく卵もよく食べられている。アンデルセンの有名な童話に、この鳥の名前を含む題名の作品がある。

問四 「和」という漢字が持つ意味としてあてはまらないものをあとのア～

エより一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ほどよい イ まぜあわす ウ なごむ エ 敬う

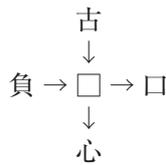
問五 次の漢字に共通する部首を足すことよって別の漢字がそれぞれできあがる。すべてに共通する部首の部分を一字で答えなさい。

- 夕 不 門 貝 昌

問六 □にひらがなを当てはめ、次の意味に対応する言葉を答えなさい。

飽あきずに求める。・・・む□□る

問七 矢印の向きに従って読むと二字熟語ができるように、□に当てはまる漢字を答えなさい。



問八 次の□には同じ語（体の部位）が入る。当てはまる語を漢字一字で答えなさい。

- がすわる □を決める □をさぐる

問九 次のア・イのうち正しい表現はどちらか。記号で答えなさい。

- ア 新製品の開発に心血かなむを傾ける。
- イ 新製品の開発に心血かなむを注ぐ。

問十 次の——線部の表現が正しければ○、間違っていれば正しい表現を答えなさい。

いつも調子のいい兄の口裏に乗って思わぬ失敗をした。

問十一 「ひるむ」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。「行く↓行かない」のように、形を変えてもかまいません。また話を通じれば主語がなくてもかまいません。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

おしゃれなカフェでふたりの女性が話しています。友だちどうしでしょうか。

「わたし、このまま結婚こんしないでしょうと思うんだ」

「ふくん、どうして」

「なんだか結婚って息苦しいし、このまま一人のほうがラクだなんて……」

「そっか、ま、人それぞれだもんねえ」

次に、とある大学の授業を覗いてみましょう。どうやら討論形式の授業をしているようです。

「今日のテーマは『私たちはオンラインの環境を制限した方がよいのか』です。グループに分かれて、一〇分くらい議論してください」

教員の掛け声とともに、学生が気だるそうに移動する。

「オンラインの制限だつてよ。どうする?」

「どうしよっか」

「強制とか制限っていうより、人それぞれでよくね?」

「そっだよなあ……」

皆さんも誰か①と話しているときに、つい「人それぞれ」と言ってしまうことはありませんか。ここにあげたような会話は、こんにち、いたるところで見られます。この章では、あるていど顔を見知った関係のなかで展開される「人それぞれ」のコミュニケーションに注目していきます。

「一人」になれる条件が整い、人びとの選択や決定が尊重されるようになった社会では、さまざまな物事を「やらない」で済ませられるようになります。ある行為を「やらねばならない」と迫る社会の規範は緩くなり、何かを「やる」「やらない」の判断は、個々人にゆだねられます。

この傾向は人間関係にも当てはまります。私たちが生きる時代は、閉鎖的な集団に同化・埋没することで生活が維持されてきたムラ社会の時代と違います。生活の維持は、身近な人間関係のなかにはなく、お金を使って得られる商品やサービスと、行政の社会保障にゆだねられるようになったのです。

このような社会では、誰かと「付き合わなければならぬ」と強制される機会が、徐々に減っていきます。会社やクラスの懇親会への参加はもはや強制される時代ではありません。地域の自治会への加入もニオイ性が強くなりました。趣味のサークルを続けるか続けなしかは、まさに「人それぞれ」でしょう。

誰と付き合うか、あるいは、付き合わないかは、個々人の判断にゆだねられています。俗っぽく言えば、私たちは、(嫌な)人と無理に付き合わなくてもよい気楽さを手に入れたのです。

今や、人と人を結びつける材料を、生活維持の必要性に見出すことは難しくなりました。人と人を結びつける接着剤は、着実に弱くなっているのです。

では、このような社会で、つながりを維持するにはどうすればよいのでしょうか。生活維持の必要性という、人と人を強固に結びつけてきた接着剤は弱まっています。そうであるならば、私たちは、目の前の関係をつなぎ止める接着剤を新たに用意しなければなりません。そこで私たちは、弱まってきた関係をつなぎ止める新たな補強剤として、つながりに大量の「感情」を注ぎ込むようになりました。

このような傾向は、メディアからも読み取ることができます。日本映画界の巨匠、小津安二郎監督の作品に、『長屋紳士録』という短い映画があります。この映画は、終戦から二年後の一九四七年に公開されました。当時は、東京下町を舞台にした人情劇と評価されています。簡単にあらすじを紹介しましょう。

おもな登場人物は、長屋の住人と少年です。物語は、長屋に住む女性とところに、実の親とはぐれてしまった子どもが届けられるところから始まります。そのさい、長屋のその他の住人とひと悶着あるのですが、結局、女性が少年の面倒を見ることになりました。

最初は子どもの世話を嫌がっていた女性も、だんだんと情が移り、子どもをかわいらしく思ってきました。しかし、その矢先に、子どもを探していた実の親が登場し、女性と子どもの間に別れが訪れます。子どもが去った後、女性はあるため親子のつながりのよさに気づく、というのが大まかなあらすじです。

長屋の住人は、鍵もかけず、お互いの家にしょっちゅう行き来をし、何かにつけ雑談をします。親子のつながりや、長屋の住人どうしの密接な交流。

こういった言葉からは、「昔ながらの温かなつながり」を想像することができます。

しかし、今の人びとが見ると、この映画に対してかなりの違和感を抱くでしょう。その理由は、登場する人びとの感情的な交流の少なさにあります。人情劇であるこの映画のなかで、スキンスリップと言いうる場面は、少年が女性の肩をたたくシーン以外、いっさいありません。感情的な交流の少なさは、実の親と子どもの再会のシーンに集約されます。

物語のクライマックスである親子の再会、および、少年と女性との別れは、現在の感覚からすると、さぞ感動的に演出されるのではないかと思います。しかし、『長屋紳士録』において、そのような表現はまったくありません。

再会を果たした親子は、互いに駆け寄ることも、抱き合うこともありません。それどころか親は、近寄る子どもを手で押しつけ、女性にお詫びと御礼の挨拶をすることを優先させます。つまり、儀礼を優先しているわけです。

子どもと女性の別れのシーンでも、涙や抱擁はいっさい見られません。少年が「オバチャンサヨナラ」とぶつきらほうに述べ、別れのシーンは終わります。ここから、「人情劇」と言われた映画でさえも、感情表現は非常に乏しいことがわかります。

この映画を見た学生は、「A」と述べていました。この言葉は、感情に満たされた今の人間関係をよく表しています。

しかし、感情に補強されたつながりは、それほど強いものにはなりません。私たちは、相手とのつながりを「よい」と思えば関係を継続させるし、「悪い」と思えば関係からシリゾクすることもできます。この特性のおかげで、私たちは、無理して人と付き合わなくてもよい気楽さを手にしました。理不尽な要求や差別的な待遇から逃れやすくなったのです。しかし、人と無理に付き

合わなくてもよい気持ちは、Bも連れてきてしまいました。

お互いに「よい」と思うことで続いていくつながりは、どちらか、または、両方が「悪い」と思えば解消されるCがあります。放っておいても行き来がある長屋の住人とは違うのです。このような状況で関係を継続させるには、お互いに「よい」状況を更新してゆかねばなりません。つまり、つながりのなかに「よい」感情を注ぎ続けねばならないのです。

この特性は、その人にとって大事なつながりであればあるほど強く発揮されます。私たちは、大事なつながりほど「手放したくない」と考えます。しかし、あるつながりを手放さないためには、相手の感情を「よい」ままで維持しなければなりません。大事な相手とつながり続けるためには、関係からマイナスの要素を徹底して排除する必要がありますのです。

とはいえ、個々人の心理に規定される「よい」状況は、社会に共有される規範ほどには安定していません。社会のルールはなかなか変わりませんが、個人の感情は日によって変わることもあります。何かの拍子に、ふと、「悪い」に転じてしまうこともあるのです。つまり、人と無理に付き合わなくても良いつながりは、ふとしたことで解消されてしまう不安定なつながりとも言えるのです。

かといって、目の前のつながりを安定させるサイテクイカは、そう簡単に見つかりません。人の心を覗くことはできませんから。

コミュニケーションのシナンの書が書店に並び、「コミュカ」や「コミュ障」といった俗語が流布する現状は、コミュニケーションにまつわる人びとの不安を物語っています。私たちは、人間関係を円滑に進めてゆく行動様式がはっきり見えないまま、相手の心理に配慮しつつ、コミュニケーションを行う厄介な状況にさらされているのです。

この厄介な状況に対処するにあたって重宝されてきたのが、「人それぞれ」を前提としたコミュニケーションです。私たちは、たとえ相手の見解が、自身の見解と異なっていたとしても、「人それぞれ」と解釈することで、対立を回避することができません。あるいは、相手の行動が自身にとって理解できないものであっても、「人それぞれ」とすることで、問題化することを避けられます。

たとえば、この章の冒頭にあげたやりとりを振り返ってみましょう。ここで、「一人のほうがラク」と語る友人に対して、「一人でいるなんて寂しくない!? 結婚した方がいいよ」と答えるのは、あまり望ましくありません。というのも、結婚を勧める言葉は、「一人でいる」という友人の決断を損なう可能性があるからです。友人の決断を損なう行為は、相手の意思の尊重という意味ではあまり望ましくありません。かといって、慰めるのも、友人を下に見ているように思われる可能性があります。こうしたときに、「人それぞれ」と無難に収めておけば、とりあえず波風は立ちません。

ふたつ目の例は、率直に考えを述べる難しさを表しています。個の尊重を前提とした「人それぞれの社会」では、相手を否定しないことに加え、自らの考えを押しつけないことも求められます。それぞれの意思を尊重する社会では、意見を押しつけず、それぞれの考え方を緩やかに認めることが肝要なのです。

このような環境では、たとえ、自身はオンラインを制限した方がよいと思っていたとしても、それを表明すると、考えの押しつけになってしまいます。「人それぞれ」のコミュニケーションは、このようなときにも重宝されます。というのも、「人それぞれ」という言葉を使っておけば、自らの立ち位置を守りつつ、相手の意思を尊重することも可能だからです。

不安定なつながりのなかを生きる私たちは、「人それぞれ」という言葉を使って、お互いの意見のぶつかり合いを避けています。このようななかで率直に意見を交わし、議論を深めるのは、そう簡単ではありません。

人びとの心理的な発達を研究したエリク・H・エリクソンは、青年期に友人とかかわることの重要性を指摘しています。そこで想定される友人関係は、お互いの内面をさらけ出し、率直に意見をぶつけ合うようなつき合いです。このような関係性は、自我を確立するにあたり、重要な役割を果たすとみなされてきました。

しかし、第一章でもふれたように、一九八〇年代の後半あたりから、若者の友人関係の変化が指摘されるようになります。具体的には、友人と深く関わろうとせず、互いに傷つけ合わずに、場を円滑にやり過ごすことに重きをおく友人関係に変わってきたと言われています。

たとえば、新潟県の四年制大学に通う学部生に調査をした岡田努さんは、若者の友人関係の特性として、「気遣い」「ふれあい回避」「群れ」という三つの志向をあげています。ここで言われる「気遣い」とは、相手に気を遣い、互いに傷つけないよう心がける志向、「ふれあい回避」とは、友人と深い関わりを避けて互いの領域を侵さない志向、「群れ」とは、ノリなど集団の表面的な面白さを追求する志向です。これらは、「変化した」と言われる友人関係の特性に合致します。

同じような傾向は、他のデータからも読み取ることができます。図3と図4は、第一生命経済研究所と青少年研究会が、それぞれ一六〜二九歳の人びとを対象に行った調査の結果です。どちらの調査も継続調査のため、意識の変化の有り様をつかむことができます。

第一生命経済研究所の調査は、「多少自分の意見をまげても、友人と争う

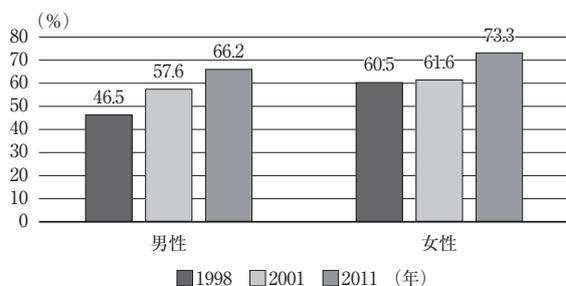


図3 「多少自分の意見をまげても、友人と争うのは避けたい」と答えた人の割合（第一生命経済研究所調査）

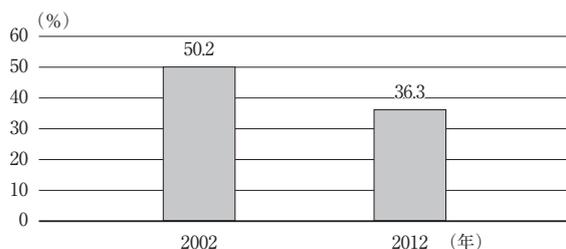


図4 「意見が合わない」と納得いくまで話す」と答えた人の割合（青少年研究会調査）

のは避けたい」という質問文に対して、青少年研究会の調査は、友人と「意見が合わない」と納得いくまで話す」という質問文に対して、いずれも「よくある」「ときどきある」と答えた人の比率を示しています。「多少自分の意見をまげても、友人と争うのは避けたい」という意見に対しては、一九九八年には男性の四六・五％、女性の六〇・五％が「よくある」「ときどきある」と答えていました。この数値は二〇一一年になると、男性六六・二％、女性七三・三％にまで跳ね上がります。一方、友人と「意見が合わない」と納得いくまで話す」人は、二〇〇二年の五〇・二％から、二〇一二年は三六・三％にまで減ってしまいました。自分の意見を曲げてでも友人と争うのは避けたいと考えている人が増え、たとえ意見が合わなくても友人と納得のいくまで話す人が減っていることがわかります。

この結果は、「人それぞれ」のコミュニケーションが横行する社会の実情

をよく表しています。「個を尊重」し、人と人をつなぎ止める材料が少ない社会では、争いや対立は、関係の存続を脅かしかねません。だからこそ私たちは、つながりを保ちたいと思う相手に対して、極力対立を回避するような心がけます。身近な人との争いや対立を避けることは、今を生きる人びとにとって、とても大事なことです。

争いや対立を避けるにあたり有効なのが、「人それぞれ」のコミュニケーションです。というのも、「人それぞれ」のコミュニケーションには、対立を表面化させず、沈静化する作用があるからです。私たちは、お互いの意見が対立やぶつかり合いに発展するまえに、「人それぞれ」という優しさの呪文を唱えて、お互いの干渉を回避しているのです。

さて、それぞれの行為や主張を「人それぞれ」として受け入れる社会は、優しい社会と言えるのでしょうか。私はそうは思いません。というのも、人びとの行為や主張を「人それぞれ」と受け止める社会には、その言葉が発された瞬間から、対話の機会をさえぎるはたらきがあるからです。

かりに、皆さんが一緒に話している相手の決定や選択に、違和感や不満があったとしましょう。争いや対立を関係の存続を脅かすものにとらえる社会では、このような違和感や不満は、「人それぞれ」という言葉に飲み込まれてしまいます。それゆえ、そのときにわき起こった違和感や不満が表面に出てくることはありません。

相手の心理をはかりかねるときも同じです。そのようなときは、下手に話題を掘り下げると、対立を引き起こすかもしれません。それならば、「人それぞれ」という形で会話を引き取って、場を無難に収束させるのが肝要でしょう。

こうした行動の積み重ねの結果、「人それぞれの社会」で交わされる会話は、当たり障りのない通り一遍のものになっていきます。

また、このような社会では、共感を得ることも難しくなります。かりにある人が、なんらかの意見に共感を求めているとしましょう。ここで、「人それぞれ」という言葉が発せられると、それ以上に踏み込んだ会話をを行うのは、難しくなります。だからこそ、私たちは「人それぞれ」という言葉に、なんとはなしの寂しさを覚えます。

冒頭にあげた女性は、もしかしたら、結婚についてもっと話したかったのかもしれませんが。しかし、「人それぞれ」という言葉が発せられると、それ以上に話を掘り下げるのは難しくなります。討論の事例も同じです。「人それぞれ」という言葉が発せられると、あまり議論は深まっていきません。

「人それぞれ」という言葉には、一見すると、相手を受け入れているような雰囲気があります。しかし、この言葉は、一度発せられると、互いに踏み込んでよい領域を区切ってしまう。それに加え、それぞれが選択したことの結果を、自己責任に回収させる性質もあります。

主義・信条を率直に表明できる「個を尊重する社会」を目指した私たちは、いつの間にか、それぞれの人たちを不透明な膜で仕切った「人それぞれの社会」をつくりあげてしまいました。「人それぞれ」の横行する社会で、対立や批判をも含んだ強靱な関係や、共感をともなう関係をつくることは難しいでしょう。

このような状況は、友人といると却って疲れてしまう、という皮肉な結果をもたらします。先ほどあげた「青少年研究会」の調査では、「友達というより一人が落ち着く」という質問への回答も求めています。この質問に「よくある」「ときどきある」と答えた人は、二〇〇二年の四六%から、二〇一二年には七一・七%にまで上がりました。今や友人関係は、「D」ものではなく、「人それぞれ」の優しさに包まれた気遣いの関係に転じたのです。

共感をともなう関係がなくなると、人びとの孤独感も強まっています。

二〇二一年、菅前首相は、孤独・孤立対策担当室を設置すると同時に、孤独・孤立対策担当大臣も任命しました。コロナ禍ということもありますが、日本社会で、孤独・孤立に注目が集まっていることがわかります。

⑤ 人とのつき合いが「人それぞれ」になると、私たちは、人間関係を「それぞれ」に自己調達しなければなりません。しかし、必ずしも望ましい人間関係を得られるとはかぎりません。また、さきほども述べたように、いまつながっている人から「切り離される不安」もあります。

このような状況は人びとに、人間関係を築くことのできない不安、または、今ある関係から切り離されてしまう不安をかき立てます。現代社会は、多くの人々が孤立することへの不安を抱えた社会、とも言えるでしょう。

「人それぞれの社会」では、人びとの孤独感も増していきます。「人それぞれの社会」であっても、多くの人はつながりを確保しています。しかし、そのつながりは、お互いの気遣いにより成り立つものであるため、なかなか本音を話すことはできません。多くのつながりに囲まれているにもかかわらず、本音を出すことができない E は、人びとの孤独感を高めます。誰も「本当の私」を見てくれないという感覚を高めるからです。

⑥ 私が教えている学生にも、いくつかのサークルに所属し、アルバイトもしているのに、いずれの場でも「素の自分」を出せないと悩んでいる人がいます。しかも、そういった人は少数ではありません。こうした人びとを対象とした卒業論文が複数書かれるほどに目立つ現象になっています。

先ほど、「友達というより一人が落ち着く」と答えた人が、二〇二二年の調査では七一・七%もいると述べました。しかし同じ調査で、「友達と連絡を取っていないと不安」と答えた人は、なんと八四・六%もいます。つまり、若い人たちは、「友達というより一人が落ち着く」にもかかわらず、「友達と

連絡を取っていないと不安」と考えているわけです。

この結果には、「人それぞれの社会」で形成される友人関係への不安と疲労の色合いがにじみ出ています。互いに傷つけないよう、あるいは、場を乱さないよう配慮する関係性は、高度なコミュニケーション技術を要するため疲れます。だからこそ、多くの若者は、「友達というより一人が落ち着く」と考えます。

しかし、その一方、人と人を強固に結びつけてきた接着剤は弱まり、友人関係とはいえ、切り離される不安がつきまといます。だからこそ、人びとは、関係から切り離されないよう、高度なコミュニケーション技術を駆使してでも、「友達と連絡を取って」いるのです。

(石田光規

『人それぞれ』がさみしい「やさしく・冷たい」人間関係を考える』

筑摩書房)

問一 波線部 a ~ d を漢字に直しなさい。

問二 —— 線部①「誰かと話しているときに、つい『人それぞれ』と言ってしまおう」とあるが、なぜか。直前のやりとりを振り返った部分を意識して、その理由となる箇所を本文中から五十文字程度で抜き出しなさい。ただし、初めと終わりの五字で答えること。

問三 A に入る文として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔のつながりは濃密のうみつだけど感情や気遣いづかが薄く、今のつながりは希薄はくだけど、感情や気遣いづかが濃い

イ 昔は人情深い人が多く温かい交流があつたけれど、今は人との交流が減ってしまつて儀礼的になつた

ウ 昔のつながりは心理的な距離が近いが儀礼を優先し、今は儀礼よりも感情表現を優先するようになった

エ 昔は人々の密接な交流が当たり前だつたけれど、今はつながりが希薄になつたため人々は昔をうらやむ

問四 Bに入る言葉として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人でいたいと思う欲望よぼう

イ より強い自由への欲望

ウ 社会規範を弱める不安

エ つながりから切り離される不安

問五 Cに入る「危険」を意味するカタカナ三字の語を答えなさい。

問六 ——線部②「私たちは、人間関係を円滑に進めてゆく行動様式がはっきり見えないまま、相手の心理に配慮しつつ、コミュニケーションを行う厄介な状況にさらされているのです。」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人とのつながりを維持するためには相手の機嫌きげんを取らなければならぬが、相手の感情が不安定なために振り回され、自分を見失つてしまふこと。

まうということ。

イ 人とのつながりが相手の感情によって左右される以上、維持するための確実な方法はないにも関わらず、コミュニケーション能力に頼たよるうとしてしまふということ。

ウ 感情という不安定な要素で人とつながっているため、関係を安定させるすがわからなくても相手に関係を切られないように気を遣づかわなければならぬということ。

エ 人とのつながりを安定させるためにあつた社会規範がなくなつたため、相手を気遣づかいながら関係を維持する方法を自分で模索もさくする必要があるということ。

問七 ——線部③「互いに傷つけ合わずに、場を円滑にやり過ごすことに重

きをおく友人関係に変わってきた」とあるが、なぜか。次の□に入る適語を本文中より五字で抜き出して答えなさい。

お互いの感情でつながっている、不安定な関係の存続を脅おびやかしかねない□を避けようとするから。

問八 ——線部④「人びとの行為や主張を『人それぞれ』と受け止める社会には、その言葉が発された瞬間から、対話の機会をさえぎるはたらきがある」とはどういうことか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 個を尊重する社会では人々の言動は自己責任とされ、「人それぞれ」という言葉によって個人の自由を脅おびやかす意見の対立を未然に防げるといふこと。

イ 「人それぞれ」という言葉はお互いの踏み込んでよい領域を区切るため、当たり障りのない会話で終わってしまい、互いの理解が深まらないこと。

ウ 人とのつながりを維持するためには、相手の心理が読めないときでも「人それぞれ」という言葉を使えば関係の存続が脅かされる心配がないということ。

エ 相手の意見を「人それぞれ」という言葉ですべて受け入れるため、相手への共感も違和感も抱くことがなく表面的な関係が続くこと。

問九 Dに入る語として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、

記号で答えなさい。

- ア 気の引ける イ 気の詰まる
ウ 気の置けない エ 気の知れない

問十 ——線部⑤「人とのつき合いが『人それぞれ』になると、私たちは、人間関係を『それぞれ』に自己調達しなければなりません」とはどのようなことか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「二人が落ち着く」と考えている人が増えている今、新たな人間関係を築くことが難しくなっているということ。

イ 誰とどの程度の距離感でつき合うかは個人の自由であり、誰からも人づき合いを強制されることはないということ。

ウ 人づき合いが強制される機会が減った今、自ら行動しないと関係を築けず孤立しかねないということ。

エ 孤独感を感じている人が増えている社会では、共感を得るために人との交流を求める人が増えるということ。

問十一 Eに入る語として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ジレンマ イ プライド
ウ レッテル エ プロセス

問十二 ——線部⑥「いくつかのサークルに所属し、アルバイトもしているのに、いずれの場でも『素の自分』を出せないと悩んでいる人がいます」とあるが、なぜ悩むのか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 複数の居場所があるにも関わらず、コミュニケーション能力が欠如しているために関係を発展させられず、孤独感を感じているから。
イ 複数の関係を築いているものの、どの居場所も失いたくないという現代特有の不安を感じ、素の自分を出すことがこわいから。
ウ 相手と関わることよりも、まず対立しないことを優先するため、人間関係を築くことができずに孤立しているから。
エ 本音を伝えられる深いつながりを求めている一方で、関係を切られる不安から表面的な関係しか築けず寂しさを感じているから。

問十三 現代の「人それぞれ」の社会について、良い点と悪い点をそれぞれ次のようにまとめました。空欄Ⅰ・Ⅱに当てはまるものとして適当なものを次のア～コからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

良い点	悪い点
・ 無理に人と付き合わなくてよい I	・ 人との深い対話ができない II

- ア つながりを安定させるため相手を束縛すくわしてしまう
- イ どのような意見を言っても理解してもらえない
- ウ 意見の対立やぶつかり合いを避けられる
- エ 人びとのコミュニケーション能力を低下させた
- オ 昔と比べて人びとの感性が豊かになった
- カ 相手に不満や違和感いわかんを抱けなくなった
- キ 本音を言い合える関係が確保された
- ク 周囲からの共感を得やすくなった
- ケ 周囲の人との協力関係がなくなった
- コ 感情で人をつながるため関係が不安定になる

